

1. はじめに

島根県西部石見地方で近世末期から生産されてきた石州瓦は、現在、愛知県の三州瓦に次ぐ全国2位のシェアを誇る。とくに「石州赤瓦」は、陶土と釉薬の性質から耐寒性、耐酸性、耐塩性などに優れており、おもに日本海沿岸地域の寒冷地に普及してきた。とはいえ現在、生産量・販売量は減少傾向にあり、各地の赤瓦景観（写真1-1）も失われつつある。

これまで、石州瓦と同じ陶土、同じ釉薬を使い、同じ石見地方で生産される陶器「石見焼」の流通範囲について調査・研究を進めてきた(阿部 2011 など)。その過程で韓国鬱陵島や北海道、佐渡島などの地域で、石見焼と同じ陶土、釉薬の石州瓦を確認した(阿部 2012)。また、2013年度から島根県江津市の石州赤瓦調査委員会の委員として予察的な分布調査を行い、各地で近代の石州瓦の存在を確認した(阿部 2014)。これらの多くは、文化財クラスの寺社や、商家、豪農などの家屋や蔵に見られ、それぞれの地域で歴史的景観の一部となっている。

このような石州瓦の流通については、歴史学・工芸科学の分野で久保(2005)による越前瓦を中心とする日本海沿岸地域の赤瓦についての報告や、考古学・民俗学からの大前(2011 など)による各地の瓦屋根についての報告などに、石州瓦についての記載が散見される。また、『図説 島根県の歴史』(1997)に民俗学、技術史的な角度から石州瓦についてまとめられた数ページがあり、その中に「石州瓦の普及域」として新旧の石州瓦の普及範囲が包括的に図示されている。しかしいずれの報告も、いつごろ、どこまで石州瓦が流通していたかという記載はない。一方、生産地の島根県内の市町村史誌等では、文献史料による記述や統計資料からその流通範囲について類推したものは散見されるが、消費地側の現地調査によって石州瓦の現存を把握した報告はほとんど見られない。

本研究は、おもに鉄道交通成立以前に日本海海運によって流通した近代の石州瓦の流通圏を現地調査により把握し、その分布の現状と変化を検証することを主たる目的とする。

日本海沿岸地域での石州瓦と他産地の赤瓦との分布の比較は、各地の赤瓦景観の保全に寄与することが期待できる。また、流通圏の把握から自然環境との関わりを考察することで、寒冷地に強い石州瓦の特色についての技術的な分析を補完できる。さらに、石州瓦流通地域での瓦屋根の葺き替えや、自然災害時の被害の復興の際などに石州瓦を再使用するための基礎資料となる。(例えば、震災で被害を受けた赤瓦地域の復興に石州瓦が使えるかなど)。本研究は、消費地での石州瓦への正しい認識、地場産業活性化のための販路の維持・継続、赤瓦を含む景観保全に向けての基礎調査としても意義がある。



写真1-1 石州瓦の赤瓦景観(江津市波子町)

2. 石州瓦について

石州瓦は、近世後半から島根県西部石見地方（石見国＝通称，石州）で盛んに生産されるようになった粘土瓦である。島根県大田市から益田市に至る沿岸部からやや内陸に細長く分布する第三紀鮮新世（約400万年前～約100万年前）の堆積層，通称「都野津層」（写真2-1）の粘土を用い，出雲地方の宍道湖南部にある1400万年前に形成された凝灰質砂岩の「来待石」（写真2-2）を粉砕した通称「来待粉」を釉薬として使い，1250℃～1300℃以上の高温で焼成する「赤瓦」が特徴である。本研究でも，おもに「都野津層」の粘土，「来待粉」を用いた赤瓦を，一般的な石州瓦として扱うこととする。

都野津層の粘土は耐火度が高く，低温では焼き固まらず1300℃に近い高温で焼成すると硬く焼き締まる。古代・中世から寺院などでも使われている灰色でマット調の（表面がざらざらしている）須恵器質のいぶし瓦が800℃程度，現在シェア1位の三州瓦などが1000～1100℃程度の温度で焼かれているのに対し，高温で焼かれた石州瓦は，硬いだけではなく，吸水性も少なく，瓦の粘土に浸みた水分が凍ることで瓦が割れやすくなる「凍害」が少ないことで知られる。

また，石州瓦に多く使われる釉薬の来待粉は，これもまた耐火度が高く，都野津層粘土の焼成温度と同じ1300℃近い高温で赤茶色に発色し，表面がガラス質になる。このため凍害だけでなく，塩分で粘土の中の鉄分が腐食する「塩害」にも強い。釉薬が溶ける温度が低いと色はやや黒くなる。古い時代の石州瓦の屋根が，一枚一枚微妙に色が違う色むらがあるのは，温度調整が難しい登り窯で焼成されていた時代の瓦である。

石州瓦の起源は定かではないが，「赤瓦」の登場については18世紀後半頃とされる。石見地方には同じ陶土，同じ釉薬を使う国指定伝統的工芸品「石見焼」があり，ほぼ同時期の江戸時代後半が始まりとされるが，これも定かではない。ただし，近世末期の成立から近代さらに1950年代頃までは，石州瓦と石見焼は同じ窯（工場）の同じ登り窯で焼成されていたことが多かった（写真2-3）。少なくとも1903（明治36）年に石見焼陶器製造業組合が発足し，1935（昭和10）年に瓦部門が独立するまでの時期（その後も）には，石州瓦の軒先瓦の瓦頭部の唐草文様と，石見焼の底面の刻印に同じ窯印が使われていたケースもあったことが明らかになっている（写真2-4）。

本研究ではとくに近代～1950年代にかけて登り窯で焼かれていた石州瓦に注目する（写真2-4）。この時期の石州瓦の特徴としては，

- ・陶土がクリーム色。
- ・「油瓦」の別名があり表面が光沢のあるガラス質。
- ・裏面の施釉がなく陶土がむき出し。
- ・瓦頭部の「唐草文様」に窯印がある瓦がある。
- ・瓦に焼ムラがあるので，屋根全体の色にムラがある。

などの点が，特徴的な外見で把握しやすい。

石見地方では，1960年代から急速に瓦工場の近代化が進み，温度管理がしやすいトンネル窯の整備とオートメーション化，低温でも安定した色が出る釉薬，様々な色の釉薬の研究が進んだ。赤色以外の黒や灰色の石州瓦，赤色でも同じ色調の石州瓦は新しく1960年代以降のものと判断できる（写真2-5）。



写真2-1 都野津層路頭（江津市内）



写真2-2 来待石採石場（松江市内）



写真2-3 昭和21年頃の石州瓦の登り窯と窯出しの様子（左：江津市嘉久志町付近 右：江津市都野津町内）
『目でみる 石見の100年』より抜粋



写真2-4 大正時代頃の石州瓦(左)と同じ窯印の石見焼の刻印(右)（いずれも江津市内）



写真2-5 現在の石州瓦の統一された瓦頭部の文様

3. 対象地域と研究の方法

本研究は、上述のような特徴を持つおもに近代の石州瓦の流通範囲について、現地調査に基づく分布の現存確認により把握する。調査対象は、日本国内とくに日本海沿岸地域で江津市石州赤瓦研究会によるアンケート調査で「赤瓦あり」の回答の地域や Web 上の空中写真で「赤い屋根」の卓越することが確認できる地域とする。具体的には以下の地域。

- ・北陸以北の日本海沿岸の赤瓦地域
北海道(小樽市), 山形県(遊佐町, 酒田市, 鶴岡市), 新潟県(村上市),
石川県(加賀市), 福井県(坂井市)
- ・東北地方内陸の赤瓦地域
福島県(会津若松市, 須賀川市)
- ・西日本の赤瓦地域
福岡県, 佐賀県, 隠岐諸島 など

これまでの予察的調査で「地理院地図」や「google earth」など複数の WEB サイトに掲載されている新旧の空中写真から赤瓦の存在を推定し現地調査を行い、北海道江差町、松前町、新潟県佐渡市などで近代の石州瓦の現存を確認してきた。例えば2013年に行った北海道江差町の調査では、次のような事前準備を行った。まず事前に「地理院地図」掲載の1973年の空中写真(図3-1)で赤い屋根を探す。現地は赤いトタン屋根も多いが、過去に石見焼の分布調査を行った際、江差町内の姥神大神宮(図3-1のA)に石州瓦が使われていたことを確認していたので、これと同じ色調の屋根(図3-1のB)を探した。さらに、その位置を「google map」(「地理院地図」では江差町付近の最近の空中写真の掲載は無かったため)及び「google earth」のストリートビューで現状を確認。同様の屋根の場所を数カ所抽出し、実際に現地で確認を行った(写真3-2)。

本研究ではこのような手法を用い、WEB上の空中写真での予備調査で対象を絞り、現地調査で確認・実証する。

「瓦」に限定した移出入の統計データは少ないが(多くは「煉瓦・瓦」)補足的に使用する。また瓦をサンプリングできる場合は科学的分析も行い、定量的な考察も加えたい。

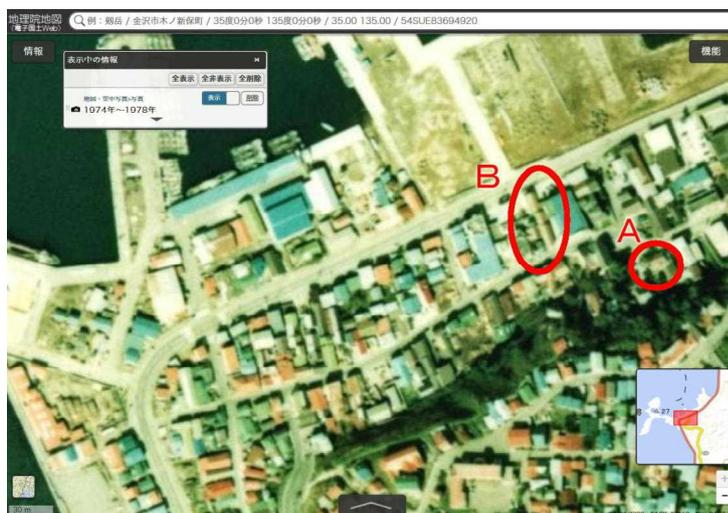


写真3-1 1974-78年頃の江差町の空中写真「地理院地図」より



写真3-2 江差町の石州瓦屋根(図3-1のB)
(2013年 阿部撮影)

4. 調査結果

1) 北海道

小樽 小樽は北海道の中でも比較的瓦屋根が多い地域である。とくに黒い燻し瓦が多いのが特徴で小樽市総合博物館・運河館の屋根瓦に代表されるように、多くは北前船で運ばれたとされる若狭瓦であることが分かっている。しかし、これまでの石見焼調査での訪問で、市内に数カ所赤瓦があることを確認していたこともあり、改めて調査した。

「地理院地図」の最新(2007年～)の空中写真を見ると、小樽運河の東側の小樽の中心部(堺町周辺)には色調を押さえた赤い屋根がある(写真4-1-1の○印内)。同じ場所の1974-78年の写真を見ると色調が明るい屋根が多く、トタン屋根だと思われるが、最新の写真と同じ場所には色調が抑えめの屋根がある(写真4-1-2)。

写真4-1-3がその場所の現状である。明治末に漁業関係資材の製造販売会社として創業した商事会社の裏手にある。近代の石州瓦の特徴のある赤瓦が葺かれている。

堺町周辺には他にも赤瓦が見られるが、これらは表面裏面とも釉薬が施され光沢が少なく表面がマット調(ざらざらしている)の越前系の赤瓦であった。

なお本稿では、調査時に「越前瓦」と明記されている展示物などは越前瓦、外観で越前瓦の特徴を持つものは越前系と表記する。

2013年度までの松前、江差などでの予察的調査では、サイズも色も違う越前系の赤瓦と石州瓦とが「混ぜ葺き」の状態屋根にあるのを多く見かけた(写真4-1-4)。強度も弱くなり、瓦の周囲がかけているものも多く見られた。そのためか、「釉薬瓦は寒さに弱い」という、本州とは真逆の評価を受けている。同様の瓦葺きの状態が小樽でも確認でき、越前系瓦の一部に石州瓦が使われているのが確認できた。ただし、戸数は少ない。

江別 江別には古い石州瓦の家屋は見られないが、野幌地区を中心とする江別地域は近代の北海道における窯業の中心地であった。窯業関係者への聞き取りや文献で、かつての瓦生産の状況を確認した。

野幌では明治後半～大正初期に瓦が生産されており、年間50,000～150,000個の瓦生産の記録がある。釉薬にはマンガンを使ったとされるので、おもに黒い釉薬瓦が作られたものと思われる。また昭和10年代後半には食塩を釉薬がわりに使う塩焼瓦が作られたとされる。かつての土管や植木鉢のような瓦であり、おもに補修用に使われ、生産は昭和30年代まで続いたとされる。1,200℃で焼成されたが、北海道(野幌)の土は耐火度が低く高温に耐えるものではないので、変形することが多かったという(以上、松下 1980 など)。赤い釉薬瓦生産の記録はないので、北海道で石州瓦や越前瓦のような赤い釉薬瓦が生産されていたことは考えにくい。北海道にある近代の赤瓦は海路で本州から移入したものと考えられ、それが沿岸部に分布している理由の一つといえる。

近代以降の石州瓦の流通圏に関する地理学的研究

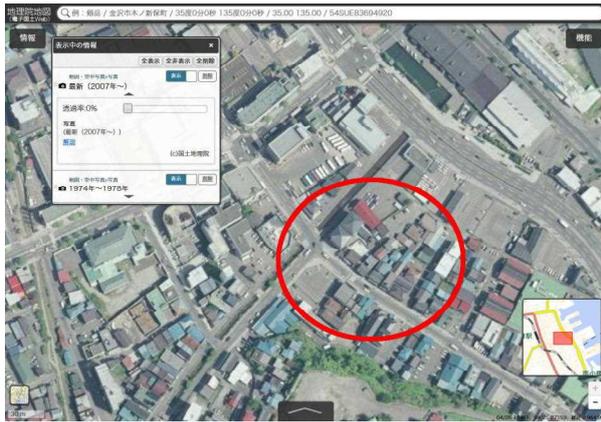


写真4-1-1 小樽市堺町付近の空中写真(2007年頃)
「地理院地図」より

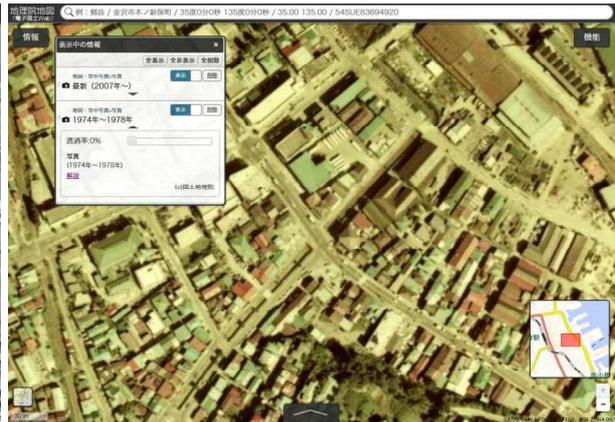


写真4-1-2 小樽市堺町付近の空中写真(1974-78年頃)
「地理院地図」より



写真4-1-3 小樽市堺町にある石州瓦屋根(写真中央) ※右は瓦頭部の拡大
(阿部撮影 2014年)



写真4-1-4 北海道松前町で見られる赤瓦の混ぜ葺き (松前町法華寺)
※色も形もサイズも違う異なる産地の赤瓦が同じ屋根に葺かれている
写真左は石州瓦と三州瓦 写真右は屋根から下ろされた越前赤瓦と石州瓦
(阿部撮影 2013年)

2) 秋田

秋田 秋田土崎港は秋田市の北部にある古い商港で、北前船の寄港地として知られる。新旧の「地理院地図」のいずれにも土崎駅西部の市街地に赤い屋根が多く見られるので、とくに色調の淡い屋根がある土崎港中央地区周辺の旧家や寺院を中心に調査した(写真4-2-1)。

結果としては、石州瓦は全く見られず、古い瓦はほとんど陶土が赤く、釉薬の発色が赤紫がかった越前系の赤瓦であった(写真4-2-2)。これらの赤瓦も崩壊寸前の空き家の屋根であったり、写真では赤瓦であっても現地ではすでに葺き替えられていて、トタン屋根や黒や緑などの瓦に変わっていて、赤瓦景観の存続は危ぶまれる。中には石州瓦と見まちがうような鮮やかな赤茶色の釉薬瓦があったが、これらは愛知の三州瓦で、すでに東北地方日本海沿岸地域には全国シェア1位の釉薬瓦が進出していることが見て取れた。

由利本荘 由利本荘市の旧本荘市の中心市街地にある永泉寺は、県の重要文化財に指定されている赤瓦の山門がある。1974-78年頃の「地理院地図」では庫裏も赤い屋根であるが、2007年頃の空中写真では山門のみが赤瓦であり、現地を確認すると確かに山門のみ越前系の赤瓦であった(写真4-2-3)。また、同市の本荘郷土資料館には市内下河原中島地区の旧金比羅神社にあった「越前敦賀平八作」「文政四年」と刻まれた越前瓦の鬼瓦が展示されている(写真4-2-4)。この地域が江戸末期から越前系の赤瓦の流通圏であったことが分かる。

にかほ にかほ市では、旧金浦町にあり南極探検の白瀬臺の生家で墓所のある浄蓮寺鐘楼、旧象潟町にあり松尾芭蕉が訪れた蚶満寺山門などの古刹一部やその周辺の民家に越前系の古い赤瓦が見られる。また、それらの修復に鮮やかな光沢のある三州瓦が用いられ、混ぜ葺き状態になっている箇所も見受けられた(写真4-2-5)。

ただし、一箇所だけ石州瓦と思われる建物を見つけた。金浦駅の南約1 km程の旧道沿いに一軒だけ蔵の屋根が石州瓦の民家がある(写真4-2-6)。今回の調査では秋田県内の沿岸部で唯一の石州瓦であった。ただし、瓦自体は古い石州瓦であるが、蔵は比較的新しく、母屋も空き家になっているので、詳細は不明である。後考に委ねたい。

総じて秋田市以南の秋田県内の沿岸部に点在する近世～近代の赤瓦は越前系で、数は多くはないが新しい家屋で赤瓦であれば三州瓦が多い。石州瓦は新旧いずれのものもほとんど確認できなかった。

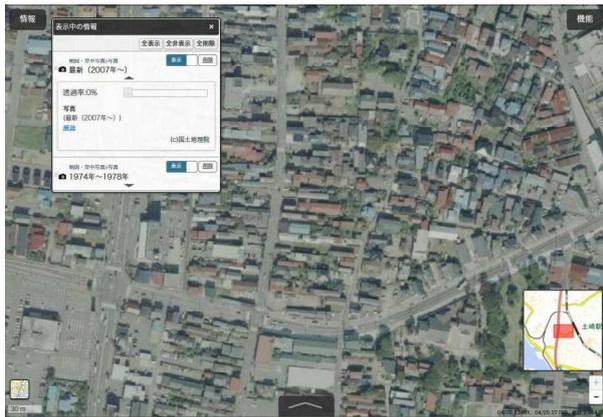


写真4-2-1 秋田市土崎港中央地区付近の空中写真
(2007年頃) 「地理院地図」より



写真4-2-2 秋田市土崎港中央地区の越前系瓦
(阿部撮影 2014年)



写真4-2-3 由利本荘市永泉寺山門の越前系瓦
(阿部撮影 2014年)



写真4-2-4 由利本荘市本荘郷土資料館の鬼瓦(越前瓦)
(阿部撮影 2014年)



写真4-2-5 にかほ市金浦地区浄蓮寺の鐘楼(越前系瓦)
(阿部撮影 2014年)



写真4-2-6 にかほ市金浦地区の石州瓦
(阿部撮影 2014年)

3) 山形

酒田 酒田周辺は様々な産地の古い赤瓦が各所に現存する。かつての西廻り航路の起点であり、北前船の重要な寄港地の一つでもあったため、各地の物資が集積している。瓦についても同様であり、石州瓦もかなり点在する。「地理院地図」で1974-78年頃の空中写真を見ても赤い屋根がかなり多い(写真4-3-1)。

港を見下ろす市内の日和山には、いくつかの神社が集中している。いくつかある社殿の屋根のほとんどが赤瓦であるが、最も大きい日枝神社ほか社殿の多くは赤紫色に近いマット調の越前系の瓦である。この中で港に最も近い位置にある日和山神社など2つの小さい社殿の屋根が近代の石州瓦と認められる(写真4-3-2)

酒田には、本間家(写真4-3-1の右の○)、旧鑑屋(写真4-3-1の左の○)などかつての豪商の屋敷が残っている。本間家も旧鑑屋にも赤瓦があるが、越前系赤瓦である。一方、酒田は1976(昭和51)年に大火災があった。その際延焼を免れた酒田駅周辺や市街地の西部などにある商店やかつての醤油屋の蔵などに古い石州瓦が点在する(写真4-3-3)。一方、鮮やかな赤茶色の新しい三州瓦の赤瓦も目立つ。建物の新旧との関係から越前瓦→石州瓦→三州瓦の順に赤瓦が移入したような印象を受ける。いずれにしても赤瓦が珍しくなく、一般的に受け入れられている地域であると感じられる。

酒田市北部に隣接する遊佐町にも赤瓦が多いが、古いものは越前系、新しいのは三州瓦で、調査の範囲では石州瓦は確認できなかった。

鶴岡 鶴岡市も赤瓦の多い地域である。沿岸部と内陸部で若干分布状況が異なる。沿岸部にある加茂地区は、鶴岡藩の外港として近世の港町として栄えた。ここには赤瓦の家屋が多く、赤瓦景観を醸し出している。越前系の赤瓦の家屋が多いが、海岸縁には近代の石州瓦の屋根も確認できた(写真4-3-4)。

加茂港から鶴岡を結ぶ街道沿いにある内陸の大山地区も赤瓦が多い。多くは加茂地区と同様の赤紫色に近い越前系の瓦である。

しかし、大山地区の専念寺の本堂の縁の下に近代の石州瓦が多数残っているのを確認した。この寺は現在は黒瓦であるが、葺き替え前の瓦をたまたま残しておいたのだという。中に鬼瓦の土台があり「昭和七年 石見生湯浜 大下瓦 工場製焼 細工人 川神長太」のへら書きがあり、昭和初期に浜田で作られた石州瓦であることが断定できた(写真4-3-5)。浜田の鉄道開通は大正10年であるから、鉄道が敷設したばかりの時期なので、恐らく海路で移入したものとみられる。

一方、大山地区から北に数kmの古刹 善寶寺でも石州瓦を確認した。入り口にあたる総門と境内に入ってすぐ右にある五百羅漢堂が、明らかに近代の石州瓦である(写真4-3-6)。寺の由緒によるとこの五百羅漢堂は、1855(安政2)年に北海道松前の商人伊達林右エ門、檜原六右エ門が寄進したものと伝えられている(写真4-3-7)。屋根が創建当時のものと確認されれば、近世・近代の石州瓦の流通圏の把握のみならず、石州赤瓦の成立・起源にも関わる大きな発見となる。

さらに北にある坂野辺地区(酒田市域)に赤瓦景観が残る。かつて坂野辺新田を開墾した佐藤太郎右衛門の末裔の旧宅やその周囲の数軒の農家の蔵や母屋に石州瓦がある(写真4-3-8)。佐藤家は善寶寺の檀家であり、善寶寺の瓦と同じ瓦だと伝わっているとのこと。

五百羅漢堂の赤瓦との関連について後考を待ちたい。

鶴岡市街地にも赤瓦が多い。とくに鶴岡藩の藩校であった旧致道館、致道博物館と施設内の建物、市街地東側の高台にある松ヶ岡開墾場の建物など、鶴岡藩に関わる諸施設が赤い瓦が葺かれている。ただしこれらはすべて表面が赤紫がかり陶土が赤い越前系の瓦である。ただし、後述する会津地方から赤瓦が移入してきたという説もある。いずれにしても鶴岡市街地には赤瓦は多いが、石州瓦は確認できなかった。

しかし本調査の結果、山形県の酒田、鶴岡のとくに沿岸部については、ともに石州瓦がかなり現存しており、近代以降の石州瓦の流通圏であることが確認できた。

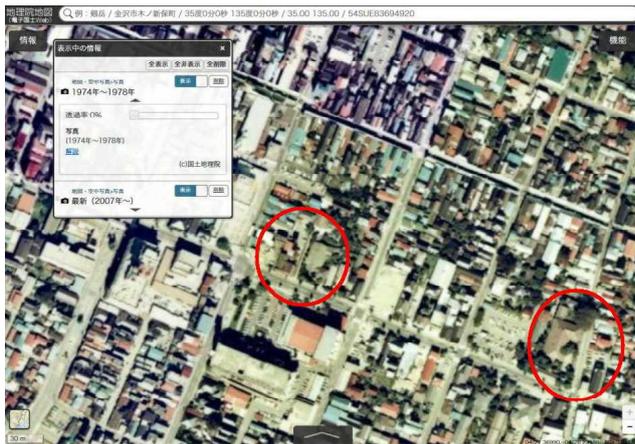


写真4-3-1 酒田市役所付近の空中写真(1974-78年頃)
「地理院地図」より

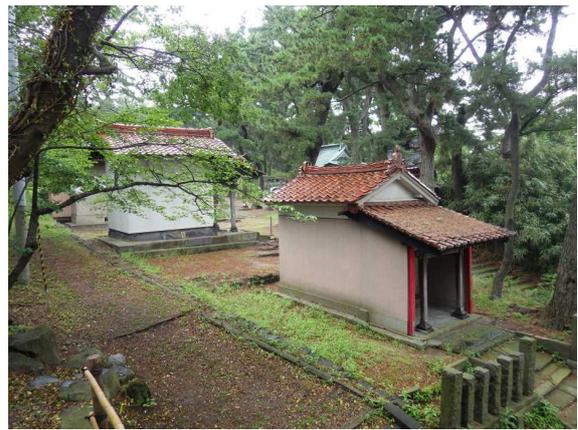


写真4-3-2 酒田市日和山にある石州瓦の社殿
(阿部撮影 2014年)



写真4-3-3 酒田市街地の石州瓦
(阿部撮影 2014年)



写真4-3-4 鶴岡市加茂地区にある石州瓦(1F底部分)
(阿部撮影 2014年)



写真4-3-5 鶴岡市大山地区専念寺に残る石州瓦 (昭和七年のへら書き)
(阿部撮影 2014年)



写真4-3-6 鶴岡市善寶寺の石州瓦(左:総門, 右:五百羅漢堂)
(阿部撮影 2014年)

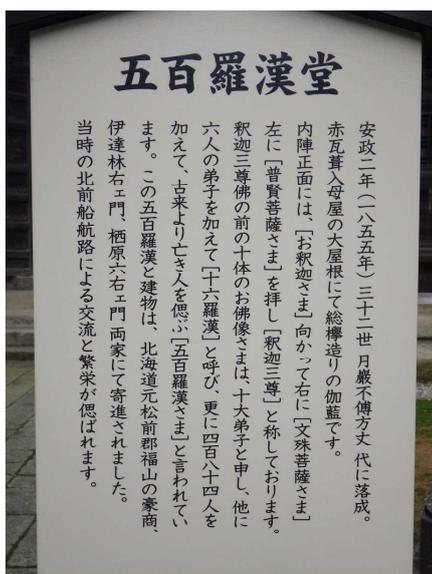


写真4-3-7 鶴岡市善寶寺五百羅漢堂の縁起
(阿部撮影 2014年)



写真4-3-8 酒田市坂野辺地区にある石州瓦
(阿部撮影 2014年)

4) 新潟

村上 インターネット検索で「赤瓦」「集落」などのキーワードで検索すると、各地の赤瓦景観の集落が見つかる場合もあり、胎内市との境に位置する村上市海老江地区はそのようなケースの一つである。現在は完全に内陸にあるが、近世は荒川河口にあった大きな潟湖に浮かぶ島のような地形で、北前船の寄港地であったという興味深い立地環境にある。「地理院地図」の1974-78年頃の空中写真では水田に囲まれた自然堤防のようであるが、これが港町だったとはにわかに信じがたいぐらいである（写真4-4-1）。「地理院地図」では淡い色調の赤い屋根であり、赤瓦の可能性がある。「google earth」のストリートビューもこの集落まで調査しており、確かに赤瓦の景観を持つ集落であることは事前に確認できた。

現地調査で、海老江集落の多くは確かに赤瓦ではあるが、越前系の瓦であることを確認した。新潟には越前系瓦の安田瓦があるので、赤紫で全面に施釉された瓦は安田瓦の可能性もある。

この海老江集落に石州瓦が僅かに存在するのを確認できた。かつてこの地で廻船業を営んでいた小川家の屋根の一部に石州瓦が残っていた（写真4-4-2）。ここだけ石州瓦がある理由は定かではないが、集落の他の越前系の赤瓦と明らかに異なる。廻船業の商家の屋根であり、海路でもたらされたものだろう。

このほかにも村上市内各地に赤瓦が点在するが、越前系の赤瓦がほとんどで、この地域でも新しいものは三州瓦の赤瓦が見受けられた。

なお、従前の調査で、新潟市街地は越前系の赤瓦が点在するが石州瓦は確認できなかったこと、一方、佐渡島では近代の石州瓦の現存を確認していることを付記しておく（後掲写真4-9-1）。

5) 福井

坂井 坂井市三国町は北前船の寄港地である三国湊として知られ、赤瓦景観が残っているが、現地調査ではほとんど越前系の色濃い赤瓦であることが分かった（写真4-5-1）。石州瓦は確認できなかった。

なお、三国湊周辺には赤瓦が多いが、内陸の福井市周辺から越前町にかけての地域は赤瓦がほとんど見られず、同じ越前瓦でも燻し瓦や黒い釉薬瓦がほとんどであり、その違いの理由は他考に委ねたい。

6) 石川

加賀 加賀市は赤瓦景観を活かしたまちづくりで有名である。市内各所に赤瓦の集落があり、とくに赤瓦が多い瀬越地区、黒崎地区、橋立地区、大聖寺地区、東谷地区を調査した。

結果として石州瓦の存在は確認できず、ほとんど越前系の瓦であった（写真4-6-1～4-6-3）。越前の職人が当地で始めたと言われる大聖寺瓦（南加賀系瓦）である。一説には加賀の赤瓦も北前船により石州から製法が伝わったと言われる（久保 2005など）。しかし、表面のマット調の質感、陶土の色（赤い土）、施釉の仕方（裏面にも施釉）などは越前瓦のそれと似ており、越前系に含めた方が適切だと考えられる。

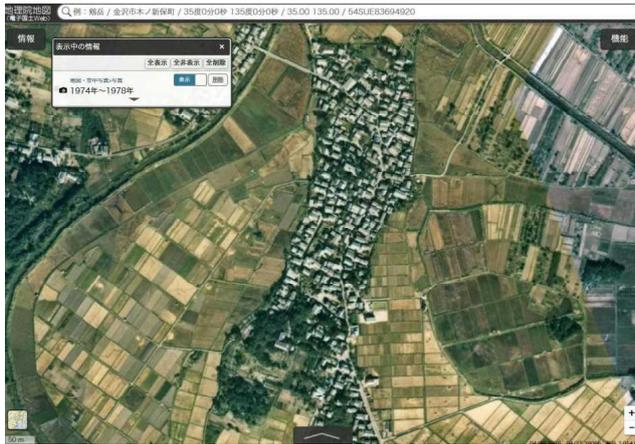


写真4-4-1 村上市海老江地区の空中写真(1974-78年頃)
「地理院地図」より



写真4-4-2 村上市海老江地区の石州瓦
(小川剛氏提供 2014年)



写真4-5-1 坂井市三国町の越前系赤瓦(旧岸名家住宅)
(阿部撮影 2015年)



写真4-6-1 加賀市黒崎地区の赤瓦景観
(阿部撮影 2015年)



写真4-6-2 加賀市橋立地区の越前系赤瓦
(阿部撮影 2015年)



写真4-6-3 加賀市東谷地区の赤瓦景観
(阿部撮影 2015年)

7) 福島

喜多方 喜多方は蔵とラーメンの街として知られる。とくに「蔵づくり」と呼ばれる建物は、外見は蔵であるが中は店舗、住宅、酒・味噌・醤油の貯蔵庫などに使われている。その屋根の多くが赤瓦である（写真4-7-1～4-7-2）。

喜多方には街の郊外の三津谷地区に、明治23年に作られた煉瓦と瓦を焼いた登り窯があり、ここで赤瓦が生産された。新潟の安田地区で瓦を焼いていた職人が移り住んで登り窯を始めたとされる（喜多方市誌編纂委員会 2001）。したがってここで作られた赤瓦は越前系の釉薬瓦がほとんどであり、新潟の安田瓦とよく似ている。

管見ではここに石州瓦はほとんど見られなかった。「ほとんど」とするのは、現在「ラーメン博物館（神社）」になっている旧家の屋根に越前系と異なる赤茶色の光沢のある瓦が数枚あるのを確認したからであるが、詳細は不明で後考を待ちたい。

会津若松・会津美里 会津若松も赤瓦の家屋が多いことで知られる。最近、会津鶴ヶ城が新潟安田瓦の赤瓦で再建されたことは有名であるが、市内にも赤紫がかった越前系の赤瓦の商店、蔵が多く見られる（写真4-7-3）。

鶴ヶ城の瓦は会津若松の南に隣接する会津本郷（現：会津美里町）で焼かれたものとされる。ここは会津本郷焼という陶器の産地で知られているが、現在瓦を生産する工場はなく、再建された鶴ヶ城の瓦は安田瓦になった。会津本郷も赤瓦の家屋が多い（写真4-7-4）。

しかし、いずれの地域においても、会津地方で光沢のある石州瓦を確認することはできなかった。とくに調査で会津、喜多方の古い赤瓦が苔むしたり藻類が繁茂したりしているのを確認したが、表面がガラス質の石州瓦では、釉薬が施されていない裏面にコケ類が付着することはあっても表面が苔生すことは少なく、こういう点からも石州瓦と異なる赤瓦であることが分かる。会津盆地が石州瓦の流通圏であった可能性は低い。

須賀川 福島県郡山周辺には赤瓦家屋が点在しており、赤瓦景観が見られる。この瓦は「益子瓦」とも呼ばれていて、栃木県の益子焼の鉄釉が使われていることからこの名があるとされている。須賀川瓦はこの流れの瓦で、須賀川には赤瓦の寺院、商店、蔵が多く見られる（写真4-7-5～4-7-6）。しかし、ここでも石州瓦は確認できなかった。

会津～郡山にかけての地域は、赤瓦の家屋、蔵が数多く点在することが分かった。ただし、文献にはこれらが関東から北上した益子系の瓦とするもの、新潟から東進した越前瓦とするものと諸説ある。外観や施釉の具合、土の色など非常に似通っており、この点は今後研究が進み整理される必要があると考える。



写真4-7-1 喜多方市の赤瓦
(阿部撮影 2015年)



写真4-7-2 喜多方市内の破損した赤瓦
(阿部撮影 2015年)



写真4-7-3 会津若松市内の赤瓦
於:野口英世青春館
(阿部撮影 2015年)



写真4-7-4 会津本郷で焼かれた赤瓦
於:会津本郷焼史料展示室
(阿部撮影 2015年)



写真4-7-5 須賀川市内の赤瓦
(阿部撮影 2015年)



写真4-7-6 須賀川市内の破損した赤瓦
※陶土、施釉が石州瓦と異なり、越前系に近い。
会津の瓦と似ているが陶土が異なる(写真4-7-2)。
(阿部撮影 2015年)

8) 福岡・佐賀

従前の調査で福岡県の北九州から筑豊地域にかけて、石州瓦景観が見られることを確認していた。聞き取り調査では、「北九州は九州の中では気温も低く積雪もあるので、寒さに強い石州瓦が使われている」との答えが趨勢をしめていた。そこで今回、近代の石州瓦流通圏の西端を求めて、九州では積雪の多い福岡県と佐賀県の県境に位置する筑紫山地一帯も調査することにした。

福岡市から佐賀市に抜ける国道263号を南下すると、福岡市早良区の山間部で赤瓦が散見される（写真4-8-1）。外観上の特徴、施釉、陶土などから石州瓦と判断できる。しかも、瓦頭の文様から福岡市南郊の山間部に比較的古い時代（少なくとも戦前）の石州瓦が残っていることが分かった。

県境を越え、現在佐賀市の市域になっている旧富士町にある上無津呂地区相尾集落は、石州瓦の家屋が集積した赤瓦景観で知られる（写真4-8-2）。聞き取り調査では、「大正時代頃に集落の庄屋が石州瓦が寒さに強いのを聞きつけ、唐津の浜崎港から馬で運んだのが始まり」とのことである。

この一帯では、新しく葺き替えられた屋根瓦も赤または黒の石州瓦である。「寒さに強い」という評価が今も根付いている。

さらに西部の唐津にかけて、国道323号沿いには石州赤瓦の家屋が点在する。瓦頭部の特徴から近代のものが現存していることが明らかになった（写真4-8-3）。

唐津から西の伊万里にかけても石州瓦の赤瓦が見られるが、今回の調査の範囲では古い（少なくとも近代の）石州瓦の現存は確認できなかった。詳細に調べればさらに西方に古い石州瓦が広がってるものとする。今後の課題である。

なお、従前の調査において壱岐、対馬、さらに韓国鬱陵島で近代の石州瓦の現存を確認していることを付記しておきたい。



写真4-8-1 福岡市早良区の石州瓦
(阿部撮影 2014年)



写真4-8-2 佐賀市上無津呂地区相尾集落の石州瓦景観
(阿部撮影 2014年)



写真4-8-3 唐津市七山地区の石州瓦
(阿部撮影 2014年)

9) 隠岐諸島

本調査では隠岐諸島の島後および島前3島のほぼすべての集落を調査することができた。隠岐諸島では石州瓦が卓越し、近代の石州赤瓦から最近の黒や緑などの石州瓦が混在していることが確認できた。とくに隠岐諸島内の集落の瓦景観の観察により新旧の瓦流通に次のような特徴があることが分かった。

- ・各集落では海岸沿いから順に石州瓦が導入されている。
- ・沿岸部の商店、民家の蔵と母屋に明治大正期の赤瓦がある。
- ・母屋は新しい赤瓦や黒瓦に葺き替えられている場合が多い。
- ・内陸部の家屋（農家）は新しい石州瓦が多い。
- ・学校や公共施設などに新しい石州瓦が使われていることが多い。
- ・海に開けた方角（どちらの海に面しているか）によって集落毎に瓦の窯印が違う。

これをパターン化すると図1のようになる。

また、隠岐にある石州瓦と同じ「窯印」をもつ明治・大正～戦前の赤瓦は、佐渡島や韓国鬱陵島などにも分布していることが確認できた（写真4-9-1～4-9-8）。これらの石州瓦が、石見地方からそれぞれの地域にバラバラに流通したのか、隠岐を「要」の位置として隠岐経由で日本海沿岸各地に広がっていったのか、後考を待ちたいが、隠岐とその他の地域が繋がる北前船の交易ルートと石州瓦の分布と関係があることが、これまでの調査で明らかになった。

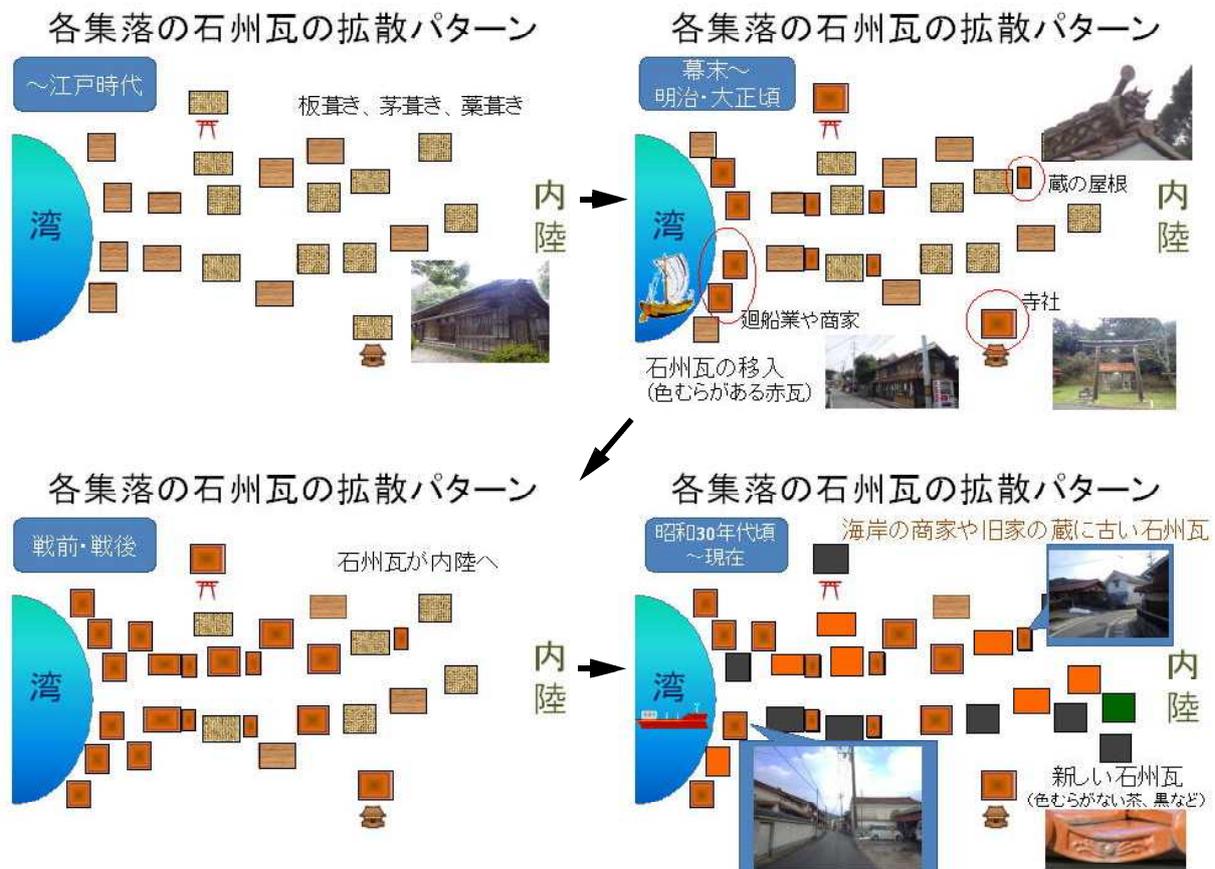


図1 隠岐諸島内の集落に見られる石州瓦の流通拡散パターン（模式図） 阿部作成



写真4-9-1 相川文書館(旧相川銀行) (2012年 阿部撮影)



写真4-9-2 写真4-9-1の瓦頭部 (2012年 阿部撮影)



写真4-9-3 海士町菱浦の石州瓦 (2015年 阿部撮影)



写真4-9-4 写真4-9-3の瓦頭部 (2015年 阿部撮影)



写真4-9-5 旧鬱陵郡守官舎 (2010年 阿部撮影)



写真4-9-6 写真4-9-5の瓦頭部 (2010年 阿部撮影)



写真4-9-7 海士町知々井の石州瓦 (2015年 阿部撮影)



写真4-9-8 写真4-9-7の瓦頭部 (2015年 阿部撮影)

10) 三州瓦産地（愛知）

本調査の過程で、東北地方などで三州瓦の新しい赤瓦が散見された。石州赤瓦と三州赤瓦との違いを確認するために、三州瓦の生産地として知られる愛知県高浜市で現地調査・文献調査を実施した。三州瓦は現在、国内の瓦生産のシェア 1 位を誇る。石州瓦と同様、ここでも寺社に使われていた瓦は近世から作られ始めているが、本格的に発展するのは庶民の家屋で使用されるようになった近代以降である（高浜市やきものの里かわら美術館（2010））。三州瓦は近世～近代はじめはおもに「いぶし瓦」であり、近代に入ってから、常滑の土管生産の技術である「塩瓦」（食塩を釉薬がわりに使い、表面に光沢を出す）技術を応用した「塩焼瓦（赤瓦）」が盛んに生産された。従前の調査で、ロシアサハリン州（旧樺太）で石見焼の調査を行った際、日本領時代の1937年に樺太庁博物館として建てられたサハリン州郷土博物館の屋根瓦が「日本洋瓦」（現在仙台市で営業専門の会社として存続）と社名が入った塩焼瓦であることを確認した（写真4-10-1～4-10-2）が、塩焼瓦はいわゆる日本の和瓦としてではなく、このような洋瓦やタイルのような製品として作られていた。三州瓦の産地で、陶器瓦と言われる釉薬を使った瓦が生産されるのはおもに第二次世界大戦後以降とされており、本調査で対象とする近代の赤瓦が各地に普及するほど生産されたとは考えにくい。三州で現在生産されている釉薬を使った赤瓦も、赤い陶土の影響なのか、赤みがかった茶色で石州瓦とは外見が異なる。また、屋根最前面の軒先瓦の瓦頭部に文様が入っていることが少ない（写真4-10-3）。

生産時期、製法、製品の特徴とも、同じ施釉の赤瓦でも石州瓦と三州瓦では大きく異なることが確認できる。



写真4-10-1 サハリン州郷土博物館の屋根
(2012年 阿部撮影)

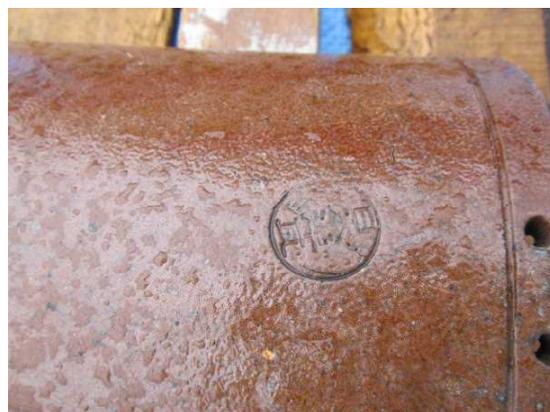


写真4-10-2 サハリン州郷土博物館の三州瓦
(2012年 阿部撮影)



写真4-10-3 高浜市内の三州赤瓦
(2015年 阿部撮影)

5. 考察

本研究では、「地理院地図」「Google map」のようなインターネット上の空中写真から赤瓦の分布地域を探し、「Google Earth」のストリートビューのような画像で存在場所を特定し、現地ですべてに調査するという手法をとった。地域の設定も恣意的になるし、精度の低い調査にならざるを得ないことは承知していたが、本調査のように、遠隔地で限られた時間で広く「モノ」の分布調査をする際には一定の効果があると考えられる。地理学研究・調査の「王道」ではないかもしれないが、とくに調査後半では、「赤瓦」「景観」などのキーワード検索から各地の赤瓦のある地域を探し、空中写真から調査箇所を特定することは大変効果的に調査を進められた。しかし、この方法はあくまでも赤瓦の存在の可能性を推測するに過ぎず、例えば場所を特定して「ストリートビュー」などで近づいても、屋根の上の瓦の色・形の詳細を確認することは不可能であり、インターネットが隆盛になっても、やはり現地で実物を確認する重要性はむしろ増すようにも思われる。

現地調査の結果から、従前の調査で石州瓦を確認していた北海道松前、江差、佐渡島、壱岐、対馬、韓国鬱陵島に加え、さらに広い範囲で近代の石州瓦が流通したことが確認できた。北海道小樽、山形県酒田・鶴岡、新潟県村上、佐賀県唐津などで古い石州瓦が現存しており、福島県中央部の会津地方、須賀川などでは同じ赤瓦でも他産地の瓦が卓越していた。このことから、近代の石州瓦が日本海海運による物流ルートで、主として日本海沿岸地域のとくに港町周辺に広まったことが明らかになった。

一方、本調査では石州瓦と越前系の赤瓦との競合関係についても興味深いことが分かった。近代の石州瓦は日本海海運で北上するが、福井県の越前地方から加賀、能登、越後地方の沿岸部では越前系の赤瓦が卓越し、石州瓦はほとんど見られない。羽越地方以北も酒田周辺を除くと越前系の赤瓦が多く、北海道ではほぼ対等程度の分布となる。このことから、日本海沿岸地域の赤瓦は、近世の早い時期(17世紀後半～)に北陸以北に越前瓦が広まり、その後(18世紀後半～)石州瓦が成立し流通した(久保 2005)。いち早く近世に越前系の赤瓦が流通した北陸～東北を避ける(迂回する)ように、主要な港町と、越前系が少なかった北海道で石州瓦が隆盛となったものと判断できる。赤い釉薬瓦が寒さに強いという評判が寒冷地で広がっているが、これは越前瓦が先に広まり一定の評価があった所に、より堅くて吸水性の低く凍害や塩害に強い石州瓦が流通したことで評価を高めたのではないかと推察できる。このことから、日本海西部地域においても、積雪のある北九州や筑紫山地一帯の山間地域では、「寒さに強い」ことで近代以降石州瓦が受け入れられ広まっていった。こうして例えば、隠岐島と佐渡島、隠岐島と韓国鬱陵島、北海道小樽と佐賀県唐津などの距離の離れた東西(南北)の地域に同じ石州瓦が現存することに繋がっていると考えられる。

ところで、島根県浜田市には近世～近代の廻船問屋の記録帳である『諸国御客船帳(御客船帳)』が多数現存しており、そのいくつかは翻刻出版されている(柚木 1997, 1992など)。この中からかつて浜田湊で、いわゆる「北前船」が瓦を買積した記載を集計すると図2のようになる。

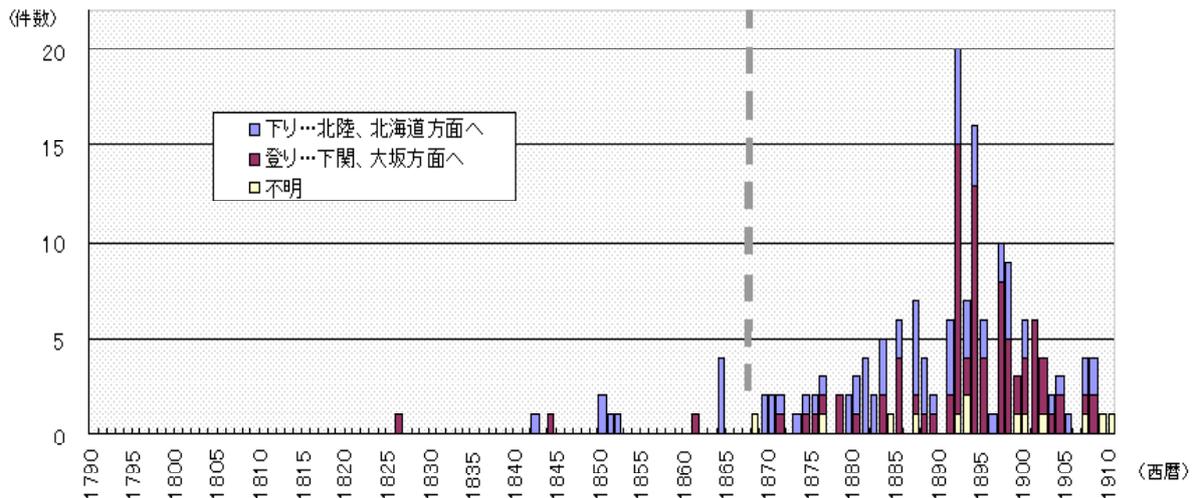


図2 江戸～明治期に浜田の廻船問屋で「瓦」が購入された回数（柚木, 1977, 1992 より阿部作成）

あくまでも浜田の記録ではあるが、石州瓦が近世末～近代に入って当初は北方への下り船で、次第に南方への登り船で購入されていくことが分かり、これは本調査で明らかにした石州瓦の分布の進展を裏付ける資料となる。

これらとは別に、海上交通のみで発達してきた隠岐諸島の調査では、海路で流通した石州瓦のミクروسケールでの拡散パターンが明らかになった。隠岐諸島はほぼ全域で石州瓦が卓越しているが、新旧のものが混在している。しかしよく観察すると、上述図1のような拡散パターンがあることが推定できた。他地域ではこのパターンに陸路からの製品移入が加わるのでさらに複雑になると考えられる。

本調査は、屋根の上の瓦の調査であるので、いかんせん目視に頼らざるを得ず、ごく定性的（むしろかなり主観的）な調査であると言わざるを得ない。しかし、越前系の瓦と石州瓦とでは、見た目の色調などの他に、サイズの違い、瓦頭部の文様、裏面の施釉の有無など明確な違いがある。本調査では、従前の調査で確認していた軒先瓦の瓦頭部の文様について、同じものがいくつも確認できた。また、とくに瓦屋根の庇の端の部分の、裏面が見える部分を注視し、石州瓦であることの特定をするように心がけた。

調査の過程では、屋根の下に破損した瓦の破片が落ちていることもあり、家屋の持ち主の許可を得て持ち帰り、科学的な分析ができたものもある。目視でも石州瓦の可能性が高い鶴岡市大山地区の専念寺、善寶寺の二寺で大きめの瓦の破片を提供いただき、浜田市にある島根県産業技術センター浜田技術センターで化学的分析を試みた。複数の方法で分析中であるが、陶土の耐火度を測る「ゼーゲル値」を測定する調査では、専念寺の瓦が「SK20+」、善寶寺の瓦が「SK19」と、かなり高い数値の結果が出た。ゼーゲル値とは、粘土や釉薬の成分のアルミナ、ケイ酸などの配合を少しずつ変え6cmほどの三角錐の形に固めた「ゼーゲルコーン」と、陶器のサンプルを同時に焼成し、サンプルが変質した時点で同時に変形したゼーゲルコーンを比較する測定である。「SK20+ (溶倒温度1530℃以上)」「SK19 (溶倒温度1520℃)」はともに1500℃以上の高温でも変質しない耐火度の高い（高い温度で焼成された）瓦である。ちなみに、国内の瓦のゼーゲル値は、石州瓦が SK18～SK20程度、三州瓦の耐寒瓦が SK17程度 (溶倒温度1480℃)なので、鶴岡の2寺の瓦は現在の国内

の瓦と比較しても高い部類に入り、石州瓦であることがほぼ比定できる。なお、村上市海老江の一般的な土蔵にある越前系の赤瓦についてもゼーゲル値を調べたが「SK13+ (溶倒温度1380度℃)」であった。石州瓦が登り窯で焼成されていた近代の時期には焼成温度は1300℃以上になることもあったので、この瓦は溶けてしまい、科学的分析でも石州瓦との違いは明確になった。

なお、このことは、北海道などで石州瓦と他産地の瓦との混ぜ葺きが行われている場合には、瓦のサイズの違い、形の違いだけでなく、堅さや耐火度などの耐久性の違いがあることを示すもので、品質管理の面で悪影響を及ぼす可能性があることを示唆する。実際に北海道で聞き取り調査では、本州では「耐寒性がある」とされる石州瓦や他の赤瓦が、「寒さに弱くすぐ壊れる」という「悪評」に繋がっていることに驚いたが、品質の違う瓦の混ぜ葺きがその評価に繋がっている可能性があることを指摘しておきたい。

6. まとめと今後の課題

本研究では、従前の調査と今回の現地調査の結果から、近代の石州瓦の流通圏が北海道小樽以南の日本海側から九州北部の日本海沿岸地域、佐渡島、隠岐諸島、壱岐・対馬、韓国鬱陵島の日本海島嶼部に及んでいること。ただし、北陸～羽越地方については近世からの越前系赤瓦が卓越していることを明らかにした。また、隠岐諸島など陸上交通のない地域での石州瓦のミクロスケールでの流通拡散パターンも明らかにした。

しかし、今回の調査方法は極めて定性的である。近代の石州瓦は窯（工場）の投機的な経営が多く、盛衰が著しかったので窯印（あるいは唐草文様）と窯（工場）の確定がほとんど進んでいない。生産地の精細な調査が必要である。また、近世近代考古学的な観点からの製造年代の編年同定も研究の緒に就いたばかりである。後考の進展が待たれる。

また、越前系の瓦が職人の移動という「技術移転」で北陸（越前～羽後）地域や内陸の岩代地域などに広がっていたように、石州瓦についても西日本一円で職人の技術移転による石州系の赤瓦の拡販が指摘されている。これらについては今回全く触れることができなかった。西日本の石州「系」の赤瓦の勢力圏の把握も今後の課題である。

技術的な面では、とくに遠隔地（寒冷地）の消費地で、多種類の赤瓦の混在が確認されたが、その維持管理や今後の保存技法について懸念される。古い赤瓦が醸し出す景観は独特なものであり、その景観は今後も守られる必要もあるだろう。その際に、赤瓦の違いについての認識も、今より正確な見方が求められるようになると思う。本研究がその一助になれば幸いである。

7. 参考・引用文献

- 阿部志朗(2011)：西日本における明治～昭和期の石見地方の窯業製品の流通について ～北海道，東北，北陸，韓国鬱陵島などにおける調査成果を踏まえて～，『島根県高等学校教育研究連合会研究紀要』，島根県高等学校教育研究連合会。
- 阿部志朗(2012)：韓国鬱陵島にある石見焼と石州瓦について，『郷土石見』91，石見郷土研究懇話会。
- 阿部志朗(2013)：日本海沿岸地域にある近代の石見焼，『民具研究』148，日本民具学会。
- 阿部志朗(2014)：石州赤瓦の歴史と伝播，『平成25年度歴史的風致維持向上推進等調査「古瓦流通体制構築の可能性検証や新瓦による古瓦的外観表現技術等の検討及びそれら技術の他地域との連携による安定的継承方策の検討(江津市)」報告書』国土交通省都市局。
- 大脇 潔(2011)：隠岐・出雲麓紀行－杉皮葺きと左棧瓦・石州瓦(隠岐・山陰沿岸の民俗)，『民俗文化(23)』近畿大学民俗学研究所。
- 隠岐島誌編纂係(1932，復刻版1987)：『隠岐島誌』臨川書店。
- 喜多方市史編纂委員会(2001)：『喜多方市史 第九巻 民俗 各論編Ⅱ』福島県喜多方市。
- 久保智康(2005)：日本海域をめぐる赤瓦，『日本海域歴史大系 第五巻 近世篇Ⅰ』清文堂。
- 江津市文化財研究会(1988)：『石見潟 第13号 特集 石見焼(丸物と瓦)』江津市文化財研究会。
- 江津市文化財研究会(1986)：『石見潟 第10・11号 特集 江津市の窯と窯跡』江津市文化財研究会。
- 西郷町誌編纂委員会(1975)：『西郷町誌 下巻』西郷町。
- 山藤 忠(1975)：重厚な赤色の艶 石州瓦，『日本の風土産業5 中国・四国』新人物往来社。
- 須賀川市教育委員会(1981)：『郷土 須賀川 須賀川市史 別巻』須賀川市教育委員会。
- 高浜市やきもの里かわら美術館(2010)：『三州瓦と高浜いまむかし(新装版)』高浜市やきもの里かわら美術館。
- 高浜市やきもの里かわら美術館(2013)：『みちのくの瓦 東北と三州をつなぐもの』高浜市やきもの里かわら美術館。
- 知夫村史編纂委員会(1996)：『新修 知夫村誌』知夫村。
- 鶴田真秀(1973)：『石州瓦史』江津市文化財研究会。
- 内藤正中編(1997)：『図説 島根県の歴史』河出書房新社。
- 浜田市商工水産課(1953)：『浜田の窯業』浜田市。
- 原 龍雄(1999)：『目で見る石見の100年』郷土出版社。
- 平田正典(1979)：『石見粗陶器史考』石見地方史研究会。
- 松下 亘(1980)：『野幌窯業史』野幌窯業振興協会。
- 森 信美(1936)：石見の赤瓦及粗陶器の地理的研究，『地理學』第四巻第四號，古今書院。
- 柚木 学(1977)：『諸国御客船帳－近世海運史料－上・下巻』清文堂。
- 柚木 学(1992)：『近代海運史料－石州浜田廻船問屋記録－』清文堂。
- 若槻和郎(1993)：「石見焼」歴史年表(私家版)，浜田市立浜田図書館蔵。